

阪本ちづみ先生の略歴と主要な業績

著者	牧 陽一
出版者	法政大学多摩論集編集委員会
雑誌名	多摩論集
巻	34
号	別冊
ページ	5-11
発行年	2018-03
URL	http://doi.org/10.15002/00014849

阪本ちづみ先生の略歴と主要な業績



略歴

- 1958年11月8日 足立区北千住に誕生。ちづみは千住から(?)父は農業経済学者の阪本楠彦、母政美。兄は数学研究者の阪本ひろむ。後に千葉県流山市に転居。江戸川台小学校、流山市立北部中学校、千葉県立東葛飾高校を卒業。卓球部に所属した。
- 1977年4月-1981年3月 お茶の水女子大学文教育学部中国文学専攻(山登りも)日中学院で中国語を学ぶ
- 1981年4月-1986年6月 三井物産株式会社中国室 事務職(乗馬部)
- 1986年9月-1987年9月 天津 南開大学中文系留学
中国名は阪本千鶴美(バンベン・チエンハァメイ)

牧

1988年4月－1990年3月 お茶の水女子大学大学院 人文科学研究科中国語学・文学専攻修士課程修了
1990年4月－1994年3月 お茶の水女子大学大学院 比較文化研究科博士課程
1994年4月－1995年3月 お茶の水女子大学文教育学部中国文学専攻 副手
1995年4月－2003年3月 法政大学経済学部 助教授
2003年4月 法政大学経済学部 教授（2016年に至る）
2003年4月－2004年3月 北京大学中文系 訪問学者

第一商業高校 武蔵高校 立川高校で中国語講師
1992年4月－1995年3月 東京女子大学 非常勤講師
1993年4月－1994年3月 和光大学 非常勤講師
1994年4月－1996年3月 聖心女子大学 非常勤講師
1995年4月－1996年3月 早稲田大学 非常勤講師
1996年4月－1998年3月 駒澤大学 非常勤講師
1997年4月－1998年3月 お茶の水女子大学 非常勤講師
1998年4月－1999年3月 日本大学 非常勤講師
2000年4月－2000年9月 東京大学大学院・文学部 非常勤講師（三十年代大衆文学論）

1988年11月 牧陽一と結婚 秋津、大宮盆栽町、西国分寺に住む。
1999年3月 長男 牧十和誕生
2016年9月28日 午前8時23分 他界

主要な業績

発表：都市小説として『啼笑因縁』を読む お茶の水女子大学中国文学会例会

1990年6月

張恨水作『啼笑因縁』の小説構造を20年代の北京という都市の構造と結びつけ、小説にかくされた新たな「都市」を読みといた。

都市小説として『啼笑因縁』を読む 『お茶の水女子大学 中国文学会報』第10号
1991年10月

張恨水のベストセラー小説『啼笑因縁』を、都市を手がかりに読み解こうとしたもので、公園、西山等の場所としての意味を考えつつ、小説構造が20年代の都市の構造と密接に結びつき、都市そのものを描いた小説であることを論証した。

馬原小説札記 『中国当代文学研究会会報』第7号 1991年10月

1985年頃からポスト・ルーツ文学とよばれる小説が出現した。馬原はその先駆といわれ、実験小説とよばれる数々の作品を発表した。本論は馬原の小説を読み解きながら、その文章の奥に潜む文革体験の影を論じ、新たな馬原論を展開した。

書評：張恨水及び通俗文学評価をめぐる 『東方』131号 1992年2月
現時点での張恨水評価の新しい動向をまとめている。

『啼笑因縁』をめぐるもうひとつの物語 『季刊中国』28 1992年3月

『啼笑因縁』の流行のしかたを追ったもので、この小説をめぐる起きた当時の張学良と映画スターのスキャンダル、映画化権をめぐる訴訟事件、著作権裁判など当時の資料をもとに、文学作品の受容とマスメディアの関係を考察し、新しい小説の受容の例としてこの小説を位置づけた。

鳥を飼う老人—陳建功と都市— 『季刊中国』38 1994年9月

陳建功は北京を舞台にした小説で有名な若手作家である。彼がどうして北京を描き続けるのかという問題を解明する上で、北京という都市の特殊性はそれが都市の中の大いなる田舎であり、中国人の精神的故郷となっていることを明らかにし、陳建功の小説の変化を都市の変化とからめて解説した。

蘇童—逃げてても逃げててもメビウスの帯— 『中国語』421 1995年2月

蘇童は新写実主義といわれる若手作家で、90年代最も注目されている。彼の主要作品の紹介と、その底辺に流れる何者からも逃げてしまいたいという意識を解説した。

牧

張恨水 —頑固な売れっ子作家— 『中国語』 425 1995年6月

張恨水の主要作品とその生涯を追い、彼が通俗作家として非難されながらも一生涯その立場を変えようとしなかったその矜持の精神を紹介した。

張恨水『平滬通車論』—近代に乗り遅れた男 『お茶の水女子大学中国文学会報』
第16号 1997年4月

張恨水の『平滬通車』を通じて、当時、小説を掲載した『旅行雑誌』の性格や、時刻表、コンパートメントなど鉄道がもたらした知覚の変容を論証した。

発表：張恨水列車の旅 お茶の水女子大学中国文学会例会 1997年7月

張恨水作品を通して30'sの北京と上海。その間をつなぐ列車がどういう意味を持つか、検証した。

王安憶『長恨歌』—可愛的上海小姐 『季刊中国』53号69-76, 1998年06月

王安憶の長編『長恨歌』について上海という都市とその意味について考察した。
全8頁69～76頁

発表：四十年代のひきこもり作戦 お茶の水女子大学中国文学会例会 1999年7月

四十年代の通俗小説と上海の弄堂および建築物（二階建の家）、亭子間の空間とのつながりを検証した。

小説と映画化—張恨水『銀漢双星』の場合 『季刊中国』87号 2006年12月

メロドラマの中の狂気：張恨水の代表作から 『法政大学多摩論集』31号, 81-96,
2015年03月

最後の論文となりました。張恨水の代表作を取り上げ、狂気を軸に論じている。

書評：岸陽子著，早稲田大学出版部，『中国知識人の百年 文学の視座から』，2004年
3月刊，343ページ，4800円。中国研究月報59(4), 39-40, 2005-04-25

阪本ちづみ先生 追悼文

エッセイ：2003年サーズの際に北京大学に子連れで在外研究。その時の思い出を書いたもの。

新歳時記 春の巻 菜の花の思い出 『季刊中国』(84号), 34-37, 2006年3月

新歳時記 夏の巻 海水浴 『季刊中国』(85号), 36-39, 2006年6月

新歳時記 秋の巻 香山に登る 『季刊中国』(86号), 50-53, 2006年9月

新歳時記 冬の巻 厳寒の北京 『季刊中国』(87号), 44-47, 2006年12月

ウェブ雑誌 ARTiT :

艾未未 (アイ・ウェイウェイ) のことば8 『不合作方式 [FUCK OFF] 2』展 (フローニンゲン美術館) に関する対話 艾未未、崔燦燦 (キュレーター、批評家) 訳 / 阪本ちづみ 2013年10月23日

艾未未のことば9 芸術の啓発 インタビュー / Zoo Magazine』(2010年、NO. 26) 訳 / 阪本ちづみ 2014年3月18日

艾未未のことば10 変えていく力 インタビュー / ケイティ・ドノヒュー Whitewall Magazine (2010年春号) 訳 / 阪本ちづみ 2014年6月7日

艾未未のことば11 人権の現状がアーティストに与える影響 ヘルタ・ミュラーとの対話 2010年3月ケルン国際文学フェスティバル講座 (司会: ミシェル・クルーガー) からの抜粋 訳 / 阪本ちづみ 2014年11月12日

艾未未のことば14: 最大の変革 インタビュー / 艾曉明 (アイ・シャオミン) 2010年4月1日、北京草場地フェイクスタジオ 訳 / 阪本ちづみ 2016年5月10日
最後の翻訳の仕事になりました。アイ・ウェイウェイ研究に欠くことのできない重要な文献の翻訳訳注です。

出版物 :

(翻訳) 紙の上の月 中国の地下文学 発見と冒険の中国文学7 JICC 出版局 1991年10月

牧

中国の文化大革命終末期、北京の青年達が雑誌を地下出版した。その中でも一番の力を持ったのが「今天」という文学雑誌であり、その中から、有名な詩人、小説家が排出した。この翻訳は当時の「今天」掲載の短編小説を翻訳したものである。全238頁中、北島作「旋律」(原題:旋律)、萬之作「雪—遠い風景」(原題:遠方一雪)を担当 監修:宮尾正樹 共著者:栗山千香子、大西陽子、阪本ちづみ、西野由希子、宮尾正樹

アジアの新世紀 第3巻 アイデンティティ—解体と再構成 岩波書店 2002年12月
東アジアの新鋭の論文集の訳。劉人鵬/丁乃非著 阪本ちづみ訳「同性愛嫌悪」と含蓄・寛容の美学の翻訳。台湾の同性愛文学とそれをとりまく社会の「無言の寛容」について分析したもの。

アイ・ウェイウェイスタイル 現代中国の不良 牧陽一、浅見洋二、阪本ちづみ、宮本真左美 勉誠出版 2014年2月

ISBN:978-4-585-27018-8

現代中国を代表するアーティスト、建築家艾未未の政治・芸術・公民運動についてのインタビューの翻訳

所属した学会:日本中国学会会員 中国研究所所員 現代中国学会 お茶の水女子大学中国文学会

ひとこと 牧陽一

阪本ちづみは1920、30年代の中国大衆小説 張恨水作品の研究を中心に仕事を進めてきました。それはイデオロギーに絡めとられた中国近代文学史を大衆の側から書き換えることだったと思います。作品構造を都市構造、近代交通、映画、メディア、近代建築、近代病理、ジェンダーから読み解く斬新な切り口による論文は普遍的な読みの面白さを備えています。また同時に結末に至る哲学的思索は論自身を魅力的な作品に仕上げています。また前近代と近代の狭間に揺れ動く作品世界を動的に描写する論考は躍動感にも満ちています。さらに論考は文革後の

阪本ちづみ先生 追悼文

実験的文学・芸術にもおよび、先駆的な論文を残しています。また最近の訳業は中国における人権問題、民主化という観点にも繋がっていくでしょう。何を残したかよりも何に向かっていったのかという点でも阪本ちづみの存在は大きかったと思います。(2016/11/22)